ポケットティッシュ

彩月空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットティッシュ

【Ｎコード】
Ｎ１４１５Ｈ

【作者名】
彩月空

【あらすじ】
ティッシュ配りの女の子に恋をした。そんな小さな日常の出来事を描いたほのぼのストーリー……のはず。

「お願いしまーす」

可愛らしい声がして、僕は思わず足を止めた。

寒空の下、あんな格好でアルバイトとは大変だなぁ……。

と言うたいして面白みもない感想を抱きつつも、無料のティッシュはありがたいと受け取りに向かう。

「お願いしまーす」

受け取る瞬間、彼女と目があった。

「ありがとうございまーす」

視線で人が殺せるか。

その問いは、絶対的にイエスだ。

なぜならその日、僕は彼女に殺されたのだから――。

こんな寒い日に外に出るのは億劫だ。

買い溜めのおかげで冷蔵庫もいっぱいだし、仕事も休み。

ならば、わざわざ出かける理由などない。
けれど、僕は震える身体に鞭打って町に出かけた。
目的はひとつ。
彼女に会うためだ。

「お願いしまーす」
ポケットティッシュをもらう。
「ありがとうございまーす」
今日も、もらう。
「お願いしまーす」
たまには微笑みかけてみる。
「ありがとうございまーす」

もらう。もらう。もらう……。
やがて、うちにあるポケットティッシュが小さな段ボール箱いっぱいくらいになったころ、

僕はたまたまいつもよりも遅い時間に彼女の元に訪れた。
そして初めて、彼女の口から「お願いしまーす」でも「ありがとうございまーす」でもない言葉を聞いたのだ。

「あ、こんにちは」

「こんにちは」

手にはポケットティッシュを持っていない。
既に今日の分のノルマは終えてしまったのだろう。

「あの、いつももらってくれてますよね？」

「え……？　あ、はい」

彼女に顔を覚えられていたことに少し驚きつつも、確かに日課のようにここに来ていれば覚えられもするか、と思い直した。

「すみません。今日はもう無いんです」

眉を下げて、そう言う彼女を見ながら僕の口は自然に動いた。

「……じゃあ、代わりに君をもらえませんか？」

言ってから激しく後悔した。

何を気持ち悪いことを口走っているんだろう。

予想通り、彼女はぽかんと口を開けたままこちらを凝視しているではないか。

僕は恥ずかしさのあまり、その場を立ち去ろうと翻す。

「あ、待ってください！」

そんな僕の背に彼女の声が降りかかる。

「ポケットティッシュと違ってタダではすみませんけど……良いですか？」

「え？」

僕はその言葉に反射的に振り返る。

寒さのせいか、それとももっと別の何かのせいか、頬を赤くした彼女がそこにいて、僕は思わずにやけてしまった。

「タダより高いものはない、と言いますし」

「その上、売れ残りで、さらに割引もしていませんが」

「どうしても欲しいものなので、返品をするつもりもありません」

僕らは同時に笑い、お互いに見つめあった。

「それでは……こほん」

彼女はわざとらしく咳払いをし、ティッシュを配るように自らの腕をこちらに伸ばして例のフレーズを発する。

「お願いしまーす」

僕ははにかみながら彼女の手をとった。

「ありがとうございまーす」

そして、そのまま彼女の手をそっとポケットの中に入れたのだった。

了。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1415h/

ポケットティッシュ

2010年10月10日01時58分発行